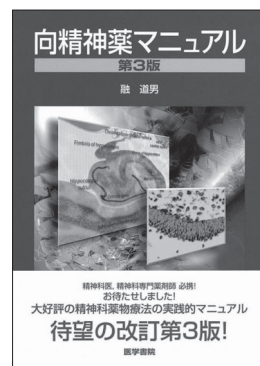


融 道男●著

向精神薬マニュアル（第3版）

書評者

倉知 正佳（富山大医学薬学研究部教授・精神科早期治療開発講座）



このたび、第2版から7年の歳月を経て、向精神薬マニュアル第3版が出版された。本書は、そのタイトルにふさわしく、個々の向精神薬の特徴、使い方、副作用が詳しく説明されているだけでなく、薬剤の作用機序、副作用の発生機序などが、精神薬理学に深い造詣を有する著者ならではの明快さで説明されている。薬物療法については、症例報告も丁寧に紹介されているので、臨場感をもって読むことができる。

第1章抗精神病薬では、A.抗精神病薬開発の歴史に続いて、B.統合失調症の神経伝達物質仮説という新しい表題で脳画像研究が追加され、グルタミン酸仮説関係が前の版より詳しくなっている。C.抗精神病薬の種類と特徴では、特に非定型抗精神病薬について、その選び方やせん妄に対する治療を含めて詳しく記述され、ドパミンD2受容体パーシャルアゴニストの明確な定義も述べられている。D.抗精神病薬の使い方は、非常に実際の・具体的で、E.抗精神病薬の副作用では、副作用の“症候学”、その発生機序、そして、治療法が具体的に述べられている。

第2章抗うつ薬（抗躁薬を含む）では、A.抗うつ薬・抗躁薬開発の歴史に続いて、B.感情障害研究の歴史とその仮説が新しく加えられた。開拓的

役割を果たした研究者の紹介は感動的でさえあり、学問は人によってつくられることがよく示されている。最近の海馬仮説についても簡にして要を得た説明がされている。C.抗うつ薬の薬理では、選択的セロトニン再取り込み阻害薬（SSRI）にもそれぞれ特徴があること、D.抗うつ薬・抗躁薬の種類と特徴では、抗うつ薬の作用機序、適応、副作用、薬物動態と薬物相互作用が明快に述べられ、抗躁薬として、炭酸リチウム、抗てんかん薬、非定型抗精神病薬による躁病の治療、そして急性交代型の治療が説明されている。E.抗うつ薬・抗躁薬の使い方に続いて、F.抗うつ薬・抗躁薬の副作用では、副作用の発生機序について詳述され、セロトニン症候群と悪性症候群（NMS）との鑑別として、セロトニン症候群は急速に発症する（1日以内が多い）が、NMSは最低約5日かかること、セロトニン症候群では不安・焦燥が高頻度で、NMSでは、セロトニン症候群のようなミオクローヌス、腱反射亢進はまれであることが述べられている。離脱症候群についても詳しい。SSRIの賦活症候群（神経過敏、不安、焦燥など）と自殺関連事象との関係が言及されている。

第3章抗不安薬と睡眠薬のA.抗不安薬では、ベンゾジアゼピンと

GABAA受容体との関係が説明されている。「バロキセチンのみでは、投与初期では不安とパニックが悪化することがあるが、クロナゼパムを併用すると、これらの有害作用も抑えられる」ことが述べられている。B.睡眠薬では、睡眠薬の種類と特徴が詳しく述べられている。「エチゾラムは、脳内ノルアドレナリンの再取り込みを抑制し、3mgを3分服すれば、抗うつ作用を示す」。睡眠薬の副作用について、健忘とせん妄を中心に詳述されていて、睡眠薬の適正な使用量を守ることの重要性が指摘されている。

本書は、精神薬理学の研究成果と臨床の実践が見事に総合された名著であり、精神科医の皆様には、本書を座右の書として繰り返し熟読されることをお勧めしたい。処方を考えるときに大変参考になるし、処方した後でも、当該項目を読み返すならば、必ず得るところがあると思う。そうすることにより、精神科薬物療法のエキスパートになることができる。また、引用文献も豊富で、精神薬理学を学ぶ人々にとっても、非常に参考になると思う。

A5 頁496 2008年 医学書院刊
定価 5,460円（本体5,200円＋税5%）
[ISBN978-4-260-00599-9]